

メールレター(25)

ジャズの夜は更けゆく

相変わらず 雪が降っております。tombe la neige 🎵🎵 Tombe la neige 🎵 アダモの歌うシャンソンの「雪が降る」を口ずさみたくなります。寒い夜にただ一人だけ、ラララーと続くのですが、ドリトル先生一家は、一人だけで夜を過さず、団体様で気分転換にジャズのライブハウスに集合することになりました。折しも外は半端でない雪が降っています。こんな夜は、いっそ派手にジャズでもとドリトル先生は思ったようです。

ダウンタウンにあるこのジャズハウスは老舗で、アメリカからジャズシンガーやミュージシャンがやってくるのが少なくありません。食事できますし、バーでいっぱい飲みながらということもできます。寒い、雪の降る夜でも、ジャズハウスは早くから一杯です。ステージ近くは常連がかぶりつきでいるらしく、近づけません。一杯飲むにしる、食事をするにしる、別勘定で一人10ドルを払います。入場料ということでしょうか。

ステージがよく見え、音も良く聞こえる席を用意しておいてくれました。ドリトル先生は、ジャズの歌が好みなので、プログラムをそれに合わせて選んだようです。

こういうお店もぐるっと見渡すと様々な人間模様が伺えます。お店の奥の一面のテーブルは女性達が占めているのですが、(欧米では女だけでこうした場所に出かけるのは稀なのです。増して女一人でというのは、よほど特殊な目的を持たない限りはあまり見かけないようです。こちらに来て間もないころ、一人で気分転換にジャズを聞きに行きたかったのですが、ドリトル先生に、それだけはやめてほしいと言われたことがあります。女がバーに入れるようになったのもそんな遠い話ではないとか。案外女の自由はなかったようです)、このテーブルはミュージシャンの奥さんたちの席なようです。夫に同伴というより、他の女に気を許さないよう、夫達を見張っているようです。ドリトル先生の席より奥まったあまり目立たない席からは女のすすりなきが聞こえてきます。何やら言い争うカップルの押し問答。すすりなきは止まず、やがて、ジャズの歌声にかき消されていきます。男は立ち去り、女は残され、「ジョージア、ジョージア」と叫ぶような、甘い、強い歌声のなかに、すすりなきも女の涙も沈み込んでいきます。

今夜は、ピアノ、サクソ、ギター、ドラムでバンドが構成されています。サクソ奏者が手を休めて歌うかと思うと、今までハモっていたドラマーが歌ったりと、だんだん盛り上がってきます。レイチャールズの曲が多く、ドラマーが主な歌い手のようです。張りのある、それでいてノスタルジックな声が響き渡り、かぶりつきの女性達は、立ち上がると身をくねらせ踊り始めます。

ドリトル先生一家の席は人数の割には小さいのですが、詰め込んですわることにしました。良い席を確保しなくては。。。仕事帰りの長男とそのパートナー、娘とその夫が集まり、話が

弾んできますが、歌声や音に勝てず、話は途切れ途切れになりがちです。長男の離婚の揉め事の話が多く、歌声の合間の切れ切れに聞こえるくらいの間合いの会話でちょうど良さそうです。ひと昔前、子供達が独身の頃は、剣道の稽古の後、ドリトル先生は、娘と次男をつれ、閉店ギリギリにやってきて、一杯飲み、一曲聞いて帰ることが時々ありました。リラックスしながら、心を委ねるジャズの一曲は格別だったようです。

この夜も、程よくお酒もまわり、ジャズは心に響き、長男カップル、娘カップルもしばし仕事のプレッシャーから抜け出られたのではないのでしょうか。

「それにしてもあのピアニストうまいよね。曲と一つになってる。

ピアノが目だ立たないのが本当に残念。ゆっくり聞いてみたいのに」

ドリトル先生はため息混じりにつぶやきました。ピアノが趣味(というか、家族にとっては時々その創造性のない選曲に合わせてお付き合いで聞かされ、疲れることもあるのですが)の長男は、

「パパ、他の楽器の音を落とさない限りは、それは無理だと思うよ。今夜は楽しいひと時をありがとう。」

そう言いながら、パートナーと闇を白く染める雪の中に消えていきました。それに遅れまいと娘カップルも雪のカーテンの向こうに姿を消していきました。

少し遅くまで残ったドリトル先生の耳に聞こえてきたのは、心の叫びのような甘く、激しい思いを歌い上げる声でした。

「何て心に美味しい歌声なんだ」聞き惚れてしまいました。

一見男性。年齢不詳、性不詳、この世に確たる物を持たない存在の切なさが伝わってきます。夜更けの雪の中に吸い込まれるのは生きとし生ける者の定めなののでしょうか。

この夜、40センチほどの雪が降り積もりました。